

受け継がれている「あそび」から幼児期の学びを考える

～砂、こころ、なかま～



発 表 者 宮田 潤（かもめ幼稚園）
 佐伯 留美（かもめ幼稚園）
 指導助言者 笠間 浩幸
 （同志社女子大学現代社会学部特任教授）
 司 会 者 田中 美幸（かもめ幼稚園）
 記 録 者 福間 朋子（かもめ幼稚園）
 内山 ひかり（かもめ幼稚園）

1 発表の概要

（1）主題設定の理由

本園は昨年創立50周年を迎え、創立当初から子どもたちが広い砂場で遊ぶ中で、砂場の魅力に引き込まれて心が満たされていくことを実感してきた。新園舎改築後も園庭に160坪の広い砂場を設置し、受け継がれている遊びとして砂場遊びを大切にしてきた。

2018年、笠間先生と出会い、きめ細かい砂と新しい砂場の道具を取り入れることで、新たな遊びにも挑戦したり今までの遊びを発展させたりして子どもたちはダイナミックな遊びを展開している。今回、この研究を通し私たちが大切にしている砂場遊びをもう一度見つめ直していくことにした。

（2）研究の目的

砂場遊びから見えてくる幼児期の遊びを明らかにしていく事として、受け継がれている遊びと子どもたちの育ちを追求していくこと、受け継がれている遊びの教育的意義を目的に研究を進めていく。

（3）研究の内容と方法

2018年に本園で作成した表「砂場遊びにおける内面の育ち」をもとに下記の4つの視点で保育を見直し、長期的な視野で遊びを捉えていく。

- | | |
|------------------|----------------|
| ① 子どもの興味と砂への関わり方 | ② 好奇心や探求心を育む過程 |
| ③ 道具と遊びの関係性 | ④ 保育者の援助と工夫 |

（4）実践記録

① 子どもの興味と砂への関わり方

年少児5月の様子である。地下水を汲み上げる手漕ぎポンプから出る水が流れ、偶然水路のようになりスコップで掘っている。その様子を見ていた子どもたちは何も言

わずにただ見ていた。しばらく、その場で水の流れと友だちのスコップの先を目で追っていた。これは直接的に人と関わる前の段階であり、友だちの様子に興味を持ち始めそばに行ったり見たりしている段階ではないかと考える。

② 好奇心や探求心を育む過程

年少児と年長児の9月の様子である。最初は年少児だけで砂場を作っていたが、その様子を見て年長児が遊びに加わり「もうちょっとぎゅって押すよ」とアドバイスをしながら一緒に山を作っていた。経験から得たことを周りに発信することで、遊びがさらに深まっていく。

③ 道具と遊びの関係性

「砂場遊びにおける内面の育ち」の表を作成してから6年が経ち、日々の子どもたちの姿から「砂場の道具と遊びの変化」についても考えていくことにした。「スコップ」「容器」「木ごて」に焦点を当て研究を進めていくと、試行錯誤や何度もやりきるといった内面的発達要素や道具を使うと遊びが広がり、使い方も受け継がれていることを読み取ることができた。

④ 保育者の援助と工夫

砂場では子どもたちが様々な思いを持ちながら遊ぶ姿を見せ、こころゆくまで遊んでいる。目的も遊び方も自由であるため、保育者も子どもへの多様な対応が求められる。保育者は子どもたちから見てどのような立ち位置にいて、どのような役割であるといいのか、園内で話し合いを行った。子どもたちと一緒に大胆に遊びを楽しむ関わりがしたい保育者もいれば、子どもが安心できる拠点であることを一番に考える保育者、口や手を出し過ぎず子どもの様子に応じて適切にサポートすることが大切ではないかと考える意見もあった。遊び方が自由で自発的で、偶発的な砂あそびだからこそ、私たち保育者の関わりも多様かつ自由でいいのかもしれない。

(5) 研究のまとめと今後の展望

受け継がれている遊びがもたらす子どもの育ちとして、まず「やってみようかな」と興味関心が芽生え、そして遊びが広がっていく中でうまくいかないことを経験していく。うまくいかない失敗そのものが面白さであり、砂遊びの楽しさである。砂と水の配合など、遊びの中で習得していくと自分なりのイメージを実現し「できた」と成功体験を重ねていく。この子どもの育ちは年齢に関係なく遊びの中で、何回も繰り返され、一緒に遊んでいる子どもたちにも広がっていく。

今後の展望として、小学校や保護者、他の園との砂遊びを通した交流会の開催を計画したいと考えている。また、幼稚園での遊びと学びを園内外に広く発信し、小学校教育との懸け橋となっていきたい。

内面の育ちの表に、「道具と遊びの関係」についてもプラスし、より子どもの育ちと砂の関係性について追求していきたい。そして、子どもたちと一緒に遊びを楽しむためにも、保育者のスキル向上も大切だと考える。

2 研究討議

(1) 発表内容に対する質疑応答

Q.底あきバケツはどうやって作っているか

A.技術職員が底をくりぬき、やすりがけをして作る。

Q.2種類の砂をどのように設置しているか

A.粗い砂の中に遊具があり、フワフワの砂は枠で区切っている。



(2) 全体討議

◇各園で受け継がれている「あそび」について

- ・ 絵の具遊び…感触を楽しみながら、手から筆へ。感覚過敏な子は、筆のみで行う。
- ・ 自然保育…手作り遊具（シーソー、ツリーハウス：2階まで梯子、3階は縄）
危険を全てなくすのではなく、経験することを大切にしている。
- ・ 食育…1年を通し野菜や果物の生長を見たり、収穫したりしてその日の給食で食べる。
- ・ 足育…体幹を鍛えるために、牛乳パックポックリや足の指を動かす。
- ・ ドッチボール…異年齢の関わりを大切にしながら、年度末に年長児と年中児が行い、
同じ遊びを同じ時期に行うことで、また来年度へと繋がっていく。
- ・ 造形遊び…作るのではなく、遊んでいる中で発見や経験ができるようにしている。
- ・ 茶道教室…園ならではの伝統行事が長く受け継がれている。
- ・ 散歩…異年齢で鬼太郎ロードへ行く。年長児が年中、年少児を気づかいながら道路側を
歩く姿がある。
- ・ 郵便屋さんごっこ…年長児が郵便局を開き、年少、年中児がハガキを買いに行き、
秋の収穫祭の時に畑の方に感謝のお手紙を書き、届ける。
- ・ お店屋さんごっこ…ガチャガチャ、お寿司屋さんなど繰り返し遊べる工夫をしている。
- ・ 感触遊び…高野豆腐、春雨など食材を使って、実際に素手で触って感触を楽しむ。

◇かもめ幼稚園の砂場の始まり（理事長より）

約30年前、園舎横の302坪の畑を買い取った。砂地の畑で、砂遊びに没頭する子ども達を見て、「このまま砂場のままにして、子ども達の様子を見守ってみよう」ということになった。そして、現在のかもめ幼稚園の砂場に至る。

3 指導助言（全体まとめ）

どの園にも砂場があり、長年の年月をかけて、砂場遊びは受け継がれてきた遊びである。かもめ幼稚園では、砂場を30年前から時間をかけて、何世代にも渡り歴史的に受け継がれてきた。もう一つの受け継ぎとして、長期的だけでなく、現在在園している子どもたちの中でも、園生活や活動を通して文化として受け継がれている。

各園の受け継がれている遊びの共通点として、5領域の子どもたちの「健康」に関する食育、体幹を鍛えることや異年齢での関わりを通して「人間関係」などがあった。そこで、それぞれの年齢の育ちと発達の観点で、どのような健康状態であるか、あるいはどのような人間関係であるか、常に保育者は意識して過ごしているか分かった。受け継がれているということは、受け継がれている理由があり、遊びの表面的な見え方として違う遊びであっても、保育者間で、子どもたちの発達を捉えつつ、健康や人間関係、主体性を大切にしていこうなどを受け継いでいる。

砂場遊びを受け継ぐ中で、30年前と同じ遊びをしているわけではなく、砂の質が異なる砂を砂場に入れ、常に新規性を取り入れて、新たな展開へと変化しながら発展を続けている。保育者も発展できるように挑戦している。

- ① 環境…目に見えて変化が分かりやすい。底ぬけバケツや砂の種類を変えていく。ぎっこんポンプなど安全に使えるようにマイナーチェンジを繰り返して環境を変化させ繋いでいく。
- ② 保育者…子どもの見方が常にバージョンアップしている。子どもの様子を見ることから始め、様子を見ていく中で、こうかな？と見えてくるものがあった。Step 1～5で、子どもの遊びを長期的に見ていくことで、分析的に Step としての見方で、皆で共通して見える化された資料で、分かるようになっている。仮説を作ること、子どもの見方がどんどん変わっていく。保育者と子どもとの関わりで、どう子どもと関わるのか、どのように子どもとの関係を作っていくのか、保育者間でも様々な年代の中で、意見や話し合いをすることも受け継ぎであり、話し合いをすることで変わっていく。どう見るか、どう捉えるか、どう子どもと関わるか、どう環境を作るか、色々な側面から変化が見いだされていった。

長い目で見ると砂遊びの変化（系列的視点）+新たな砂遊びの提案と今引き出されている子どもの力（構造的視点）の2つの発達の視点から子どもの砂遊びを見ていく。

子どもの砂遊びは、成長とともに変化する。その変化の様子を把握することで、今何が必要か、これからどのようなことが大事か見えてくる。

- ① 新たなもの（道具）…今までになく、自分も使ってみたいと思い、使って楽しいもの。
- ② 何をする（テーマ）…意外性と不思議さと挑戦心をくすぐる活動、これまでの力や経験を総動員して取り組める活動、個人でも複数で力を合わせてでもできる活動。
- ③ 保育者（遊び心、見守る力）…保育者自身もワクワクする楽しい活動、子どもの発達の姿と遊びの展開を予想・確認できる力。

自らの目的の達成、みんなで追究や表現をすることで自分たちなりの完成となる。誰かに褒めてもらうことだけでなく、自分として満足できるのか、仲間と協同し、自分なりにできたと感じ、さらに経験を積み重ねることで受け継がれている「あそび」となる。

